

# クライアント-セラピスト間の倫理的関係を 維持・改善する「切れ・つづき」の創出

——セラピーの「枠」を補強する心理学的ツールとしての  
ダイナミック・アセスメント——

田 澤 安 弘

# クライアント-セラピスト間の倫理的関係を維持・改善する 「切れ・つづき」の創出

——セラピーの「枠」を補強する心理学的ツールとしてのダイナミック・アセスメント——

田 澤 安 弘

## 目次

- I. はじめに
- II. 事例と介入法
- III. セラピーのプロセス
- IV. 考察
- V. おわりに
- 注釈
- 文献
- 図表

## 〔要旨〕

本論のテーマは、セラピストが我欲（利他の欲求）を満たすためにクライアントを利用してしまふような、あるいはクライアントのニーズを超えて過度に援助してしまふような倫理的関係性の危機に直面した際に、それへの対処法として、枠を補強することによってセラピーを継続させることである。哲学者大橋の「切れ・つづき」の視点から枠の意味を考察すると同時に、具体的な事例を通じて、ダイナミック・アセスメントを枠の補強を目的として駆使する応用的な使用方法について検討した。

## I. はじめに

どんなセラピーであっても、セラピストが依拠するオリエンテーションの違いこそあれ、そして見えないものとして伏在しているとしても、一定の枠づけのもとに構造化されているものである。というのは、枠によってクライアントはもちろんのことセラピストもさまざまなリスクから保護され、セラピーのプロセスが安全に促進されると考えられるからである。

一例として、カール・ロジャーズに多大な影響を及ぼしたクライアント中心の意志療法（Rank, O., 1929）では、セラピーの枠が以下のように描写されている。

「……古典的な精神分析状況では、よく知られている分析家の受動性にもかかわらず、センターを占有していたのはセラピストである。

……それとは反対に、私の手法では……分析家によって用意された状況のセンターに主役として立つのは患者自身であり、その状況は、本人の心的必要性に応じて創造され、さらに造りかえられるのである」（p.10）

クライアントを受け入れるとき、セラピストはすでに一定の枠を持ちながら待っている。セラピーを開始するのであれば、クライアントはその枠のなかに入り込まねばならない。しかし、セラピストが用意している枠には柔軟性があり、クライアントに応じてそのつど臨機応変に変更される。これが、古典的精神分析と顕著な対照をなす、ランクの意志療法である。

森岡（1991）が言うように、クライアントとセラピストの双方にとって、セラピーが首尾よく展開しているのであれば、その枠は伏在して退いておりあまり意識されないはずで

---

キーワード：切れ・つづき、心理学的ツール、ダイナミック・アセスメント、倫理的関係、枠

ある。ところが、クライアントがセラピストの見えない枠づけによって保護されない、あるいは見えない枠づけによる制限に「きつさ」を感じる場合には、伏在していた枠が見えるものとして顕在化し、セラピーの枠それ自体が主題として話し合われることになるであろう。もちろん、反対もまたしかりであって、クライアント側の枠づけ（枠変更の提案）によってセラピストが保護されない感じや、きつさを感じることもあるはずである。結局のところ、協働性の枠のなかで一方または双方に何らかの不都合が生じるときに、枠そのものが抵抗感とともに顕在化するに至るのである。

いずれにせよセラピーの枠が見えるものとして顕在化し、枠の変更を余儀なくされるときには、セラピーが何らかのかたちで危機を迎えていると言っても過言ではない。本論で主題となるのは、セラピストが我欲を満たすためにクライアントを利用してしまふような、あるいはクライアントのニーズを超えて援助してしまうような倫理的関係性の危機に直面した際に、それへの対処法として、枠を補強することによってセラピーを継続させることである。具体的な事例を通じて、枠の意味とダイナミック・アセスメントの応用的な使用方法について考察するつもりである。

臨床における「枠」の研究は、中井（1970, 1974）に始まる。その後、森谷・酒木・児島・菅野・森岡・森岡（1991）に受け継がれ、今日に至っている。本論は、こうした先人たちの試みに敬意を表し、ささやかではあるが継承しようとするものである。

## II. 事例と介入法

### 1. 倫理的配慮

事例は、筆者が運営する私設心理相談室で、短期療法が感情に及ぼす効果についてリサーチを行った際に協力者として応募した方であ

る。協力者の募集は相談室のウェブサイトで行った。受け入れにあたっては、セラピーと研究に関するインフォームド・コンセントを行い、合意に至った方が短期療法に導入された。ここに記載するマテリアルは、プライバシーを保護することを確約した上で事例の許可を得たものであるが、個人が特定されないように最小限の記述に努めると同時に、内容には大幅な修正が加えられている。

### 2. 事例の概要

事例はA子さんで、40代の独身女性である。芸術系の大学を卒業後、あるカルト的な農業共同体に所属して、十数年のあいだ都会を離れて自然の中で生活している。離脱後は民間企業に就職する。しかし、次第に以下のような悩みが大きくなっていき、筆者の私設心理相談室を訪れている。来談時には、「人とうまく付き合えない」、「人と話をすると緊張して泣いてしまいそうになる」といった社交不安に関する苦痛や、「自分の気持ちが分からない」、「自分がない」といった自己覚知や自己同一性に関する悩みを口にしてている。また、セラピーへの期待としては、「もっとうまく人づきあいができるようになりたい」、「もうちょっと自分のことが好きになりたい」などと述べている。

### 3. 心理テストの特徴

インテーク面接の際に複数の心理テストを実施している。社交不安を測定するLSAS-Jは素点で82点であり、程度としては中等度と重度のあいだのレベルに位置づけられる。特性不安を測定するSTAIはパーセンタイルで92点であり、中等度の上限に位置づけられる。抑うつを測定するBDIは素点で24点であり、中等度のレベルに位置づけられる。MMPIは1回目セッションと2回目セッションのあいだに行われ、コードタイプは拡張ウェルシュ・コードで027' 841-6/359：L#F：K：

と表記されるものであった。以上の結果から、クライアントは抑うつ気分と不安が高いうえに、社会的内向性が顕著で社交不安が強いと言えるであろう。

#### 4. ダイナミック・アセスメント

筆者は、主として教育の世界で行われているダイナミック・アセスメントの手法を、私設心理相談室におけるインテーク面接に導入している。セッションの前後にそれぞれ状態不安を測定し、その変化から、クライアントがどの程度リラックス（あるいは緊張）したのか、インテーク面接がクライアントにとってどのような体験であったのか、セッションを振り返って話し合うのである。ダイナミック・アセスメントそれ自体については、リッツ（1991）や、リッツとエリオット（2007）を、インテーク面接における状態不安のダイナミック・アセスメントについては、田澤・近田（2017；2018）、田澤・本田（2017）を、それぞれ参照されたい。

ダイナミック・アセスメントは、プリテスト→介入→ポストテストの順に行われ、介入前後の得点差にヴィゴツキー（1935）の言う発達最近接領域が反映されると考えられている。本論では、状態不安のダイナミック・アセスメントをインテーク面接だけでなく、その後に導入された時間制限短期療法のすべてのセッションにおいて行ったわけであるが、各セッションのプリテストとポストテストには、クライアントがいま現在独力で達成している自己静穏機能の水準と、近い将来に独力で実現可能になる（いまはセラピストとのあいだで可能な）自己静穏能力がそれぞれ反映されると推定されるのである。

#### 5. 多元的ブリーフセラピー

多元的ブリーフセラピーは、一連のプロセス全体がセラピーとして機能するように構成されており、セッションごとに行われること

があらかじめ決められた時間制限心理療法である。

セッションの回数は基本的に4回で、1回のセッションにつき最大2時間くらい時間が取れるように配慮する。その行程は、インテーク面接→①問いを立てるセッション→心理テストの実施と対話セッションの準備→②対話セッション→③ビデオを視聴するセッション→④手紙を開封して振り返るセッション→フォローアップとなっている。

対話セッションは複数回に分けて行われることがあり、さらにクライアントのニーズに応じた内容のセッションを追加することもある。インテークから最終セッションまで約2か月を要し、最終セッションからフォローアップまで1か月程度の間隔をあける。また、クライアントにはホームワークがいくつか与えられる。

わずかな期間に最大限の肯定的変化を生み出すために、各セッションで行われるメニューはあらかじめ定められており、回数も制限されている。しかし、そのようにして定められた形式のなかで、ひとつのセッションをどのように形成していくかは自由である。協働的な関係性のなかで、クライアントに応じて修正したり、組み替えたりすることも可能である。

A子さんは、この多元的ブリーフセラピーに導入された。インテーク面接から最終セッションまで約2か月半を要し、インテーク面接の他に5回のセッションがもたれた。

### Ⅲ. セラピーのプロセス

#### 1. 各セッションの概要

##### (1) インテーク面接

来談したものの、カウンセリングをやめようかと少し迷っているという。しかし、A子さんは、その理由を言葉にすることができなかった。迷っているとは言えても、どのよう

にして迷っているのか、あるいはどんな「感じ」なのか自分でも分からないようなのである。主訴として話されたのは、会社で緊張して涙がこぼれそうになったり、うまく人づきあいができなかつたりという社交不安に関するものであった。涙ながらに語っている。

このセッションが終わった後、セラピストは自分の身体が少し軽くなり、気分も幾分高揚しているような気がしていた。それだけでなく、A子さんの力になりたい、ドロップアウトせずに通ってほしいという気持ちが強くなっていった。セッションを録画した映像を見てみると、やはりいつもの自分より「絡み」が濃密で、感情表出も豊かになっており、彼女に対してかなり心的距離が接近しているように感じられた。そこには、素の自分がそのまま映っていた。

このときセラピストは、このままではいけないと考えた。というのは、素の自分が姿を現わすこと自体に問題はないが、A子さんに対する利他の欲求が強すぎて、その欲求を満たすために彼女を利用してしまおうのではないかと危惧したからである。そこで、セラピストは、このような我欲を制限するためにアプローチの修正を考えた。そのためには、クライアントに対してよりいっそう尊敬の念を持つことと、自己強制として自分に義務を課すことが必要である。そして、後者として考えたのがセッションの枠を補強するために何かを行うことであり、それは、これまでインテーク面接にかぎって行っていたダイナミック・アセスメントの手続きを、すべてのセッションで行うというものであった。

## (2) 問いを立てるセッション

インテーク面接と同様にして冒頭で1回目のダイナミック・アセスメントを行い、その後、心理テストから知りたいことについて話し合う。立てられた問いは、全部で四つであった。その後で日常生活の話になり、また会社

で顔が赤くなってしまったと述べている。セラピストとの会話のなかでも、頬を赤らめて恥じらう場面があった。セッション終了時に2回目のダイナミック・アセスメントを行う。結果として、状態不安は63から34に下がっていた。気分について内省を促すと、セッションの冒頭よりも今のほうが落ち着いているという。そして、セッション全体を振り返ってから、互いに一礼をして終了となった。

## (3) 対話セッションの1回目

心理テストの結果について話し合う。話し合いのなかで、A子さんの笑顔が素敵であることを口にすると、彼女は周囲の人たちからも同じことを言われると述べ、それは作り笑顔にすぎないと否定している。笑顔の自分も、泣きそうになる自分も、嫌いなのだという。しかし、最後には、そのような自分をどうにかするのではなく、「受け入れなくちゃ」と口にしていく。

## (4) 対話セッションの2回目

心理テストの結果を話し合う、2回目のセッションである。話し合いのなかで両親のことが話題となり、A子さんは「親に何もしてあげられない、私は情の薄い人間……」と涙を流した。それに対してセラピストが「そのようなにして涙を流す人に情の薄い人はいない」と言うと、彼女は「やめてください!」とセラピストがそれ以上の言葉を発することを制止している。また、職場での様子に特に変化はないらしく、セラピストに対して「変わらなくてごめんなさい」と詫言っている。

## (5) ビデオを視聴するセッション

インテーク面接の映像を二人で見る予定であったが、あまり見たくないということで視聴は中止した。会社で泣きそうになることがまだ続いていて、そのような自分を隠すために仕事に没頭しているふりをしているという。「涙が出なくなる薬がないものか」とも述べている。また、寂しい感じがあり、胸の中にサーッと風が吹いているようだと言っている。

る。それから、今回初めて話されたのであるが、最近は休日になると海や山に出かけて、風景を写生しているということであった。

#### (6) 最終セッション

最後のセッションである。この日の数日前に連絡があり、折り返しセラピストが電話すると、カウンセリングをやめたいのだという。時間制限のブリーフセラピーのため、あと1回のセッション（手紙を開封して振り返るセッション）とフォローアップ面接を残していたのだが、フォローアップ面接を取りやめて、予約していた最終セッションには訪れるということで合意している。

クライアントは、セッション当日、時間通りに来談した。少し風邪をひいているようで、元気がないと口にはしている。ところが、そのような言葉とは裏腹にこれまでになくお洒落な着こなしをしており、指先はカラフルなネイルで飾られていた。

カウンセリングに関しては、もう通う意味が分からないと述べている。電話で会話した際には通院して服薬するつもりがあることを話していたので、紹介状を書いて待っていたのであるが、薬の問題ではないので病院にも行きたくないとのことであった。いまは料理を楽しんだり、趣味の写生に熱をあげており、仕事以外は楽しく過ごしているようである。今回でカウンセリングは終了するが、何かあったときには再来することを勧めて終結となった。

#### (7) 総括

2か月半のあいだで、社交不安に関して、クライアントに大きな変化は認められなかったように思われる。しかし、私生活には変化の兆しが表れて、写生を介して自然と触れ合うことが多くなるなど、楽しむことができるようになっていった。セッションのなかでは、セラピストに対して「やめてください!」と拒むなど、少しだけ拒絶する能力が育まれたように思われる。「否」を通じて現れたクラ

イアントの「我」は、あるがまま承認された上で受け入れられた。

セラピストの変化である。セッションの枠が補強されたことによって、インテーク面接におけるような心的距離感を保ったまま、あたかも戯れるかのようにその後のセッションでも安心して関与することができるようになった。このような一体化した水魚の交わりはおそらく詩によってしか表現することができず、そのため本論では描写することをしなかったのであるが、一切が自然（じねん）と表現されるような交わりが本例とのあいだでは必要であったのである。また、そのつどのセッションが一期一会を反復する場となり、クライアントがドロップアウトすることをあまり気にせずに会うことができるようになった。

## 2. 各セッションの状態不安の変化

すべてのセッションにおいて、STAIの状態不安を測定した。ダイナミック・アセスメントの手続きにしたがい、ひとつのセッションにつき、セッションの開始前と終了後の2回測定している。その結果はパーセントイルに換算し、グラフ化して本論末尾の図に示した。

インテーク面接は71→55、1回目セッションは63→34、2回目セッションは60→47、3回目セッションは55→30、4回目セッションは69→34、ラストセッションは71→47という結果であり、各セッションの冒頭で極端に緊張しているわけではないこと、すべてのセッションにおいて冒頭よりも終了時の方が不安が減少してリラックスしていることが理解される。

セッションのなかで一時的に感情が揺さぶられることがあったとしても、クライアントにとっては、毎回のセッションが安心感を与える時間になっていたようである。主訴である社交不安に関してはほとんどまったく変化がなく、ドロップアウトのリスクが常にあっ

たわけであるが、そのつどのセッションがクライアントにとってよき体験になるようにというセラピストの意向は、ある程度実現されたのではなからうか。再び危機に見舞われたときにも、誰かに援助を求めることができればと願うばかりである。

## IV. 考 察

### 1. 自己中心的な利他の欲求を克服するための枠

そもそも枠について考えることになったのは、インテーク面接終了後に、クライアントに対する利他の欲求が強すぎて、その欲求を満たすために彼女を利用してしまわないか、本人が望む以上のことをしてしまうのではないかと危惧したからである。つまり、筆者はそれを倫理的な問題として認識したのである。自分自身の動機や衝動の領域はあまり意識されないものであるが、事後的な映像の視聴がこの気づきのために一役買ったことは事実である。

枠として考えついたのは、セッション中の距離感をインテーク面接においてそうであったようにそのまま維持しながらも、二人の倫理的関係を破壊しないためには、セッション開始時と終了時の枠を二重にして分厚く補強するのがよいのではないかということであった。通常のセッションは、一礼に始まり一礼に終わるかたちで区切られ、それによってすでに枠づけされている。これは、神田橋(1990)の言うような「普通の関係に始まり普通の関係となって別れる」ための「セッションの開始時と終了時の礼儀作法」のことである。枠の二重化とは、このようなセッションを区切る礼儀作法の枠づけに追加して、セッション開始時と終了時に不安を測定するダイナミック・アセスメントの手続きを挿入することを意味している。

筆者は、インテーク面接のみならず、すべ

でのセッションにおいてもダイナミック・アセスメントを行うことによって枠づけしようと考えた。その経緯は、神田橋の言葉を使えば以下のように表現されるであろう。

まず、インテーク面接において「難儀している人が助けを求める」→「他者の中に助力の意図が誘発される」→「親子関係類似の抱え環境の出現」という、セラピーとしては自然な出来事が起こる。ところが、インテーク面接終了後に、クライアントの「助力を求めるパターン」によって触発された「助力の意図」が他のクライアントと比較して強すぎたのではないかという感覚を持ったセラピストは、録画された映像を視聴してそのことを確信する。ここで、引き出された助力の意図と、これでよいのであろうかという危惧が葛藤を起こして、その対応としてクライアントに対する新たな枠の提案を思いつく。その提案は、「利他の欲求であったものを、改めて利他の意志として選びなおした」ということであり、これは衝動的な利他の欲求の直接的満足を放棄して随意的な利他の意志に転ずることを意味している。

筆者も例外ではないが、サイコセラピーを生業とする人間は、誰かの力になりたい、困っている人を救いたいという利他の欲求を動機としてこの世界に足を踏み入れた者が少なくないのではあるまいか。この欲求はあくまで自己中心的な我欲である。人間としての自然な傾向性に、他律的に依存しているにすぎない。セラピストとしての職業生活を送るなかで、これは利他の意志に変化していることが望ましい。この道を選んでかれこれ30年を経とうとしている筆者は、自分自身、すでに利他の欲求が意志へと変わったものと思っている。

ところが、それにもかかわらず、いまだに自己中心的な我欲が顔を出すことがある。それが、本論の事例である。利他の欲求とはいえ、セラピストが自然的衝動のまま行為するのは、自分の我欲を満たすための手段として

クライアントを利用することを意味している。ここに倫理的な問題が発生する。セラピストは、このようにして他律的な我欲に満ちた自己中心主義を克服して、自律的かつ自由に行うしなければならない。そのために行うのが、枠づけである。

本論における枠づけは、我欲という自然的衝動を覚知することによって葛藤し、それに抗うために義務としてみずからを強制しようとする意欲に発するものであった。この枠づけによる制限は二重であり、利他の欲求という自分の我欲に身を委ねようとする傾向性と、クライアントを自分の欲望を満たすための手段として利用しようとする傾向性が制限される。枠づけという随意的な意図の創造は、我欲が枠というルール・規則に転化し、自己中心的な我欲が転じて他者中心的に実現されることを意味している。つまり、我欲に依存していた他者の援助が、自覚的かつ随意的な援助へと変化するのである。

## 2. 「切れ・つづき」としての枠

このような枠の意味を、哲学者の大橋(1986)による「切れ・つづき」の概念を駆使して論じているのが森岡(1991)である。以下は、枠とはすなわち切れであると考えた森岡の論考を発展させたものである。

大橋は「切れ・つづき」について、「異質なもの同士が互いに他の内部へと浸透しつつ、しかもまったく別のものとして際立つという構造なのである。この構造を造形的に表現する『芸』もしくは技巧は、それ自体が『切れ』である」と述べている。この「切れ」を使って「利他の欲求」から「利他の意志」への変化を説明すると、「利他の欲求はいったん切れをくぐると利他の意志になる」と表現できるのであるが、この点について以下に詳しく検討する。

神田橋の「利他の欲求」は、大橋の言う「自然(じねん)」ないし「自然性」に相当

する。自然とは「物や人の本来の自然本性」のことである。われわれは、自然性を切ることなしには自由になれない。つまり、自然のままに生まれた人間は、いったんその自然的生命のあり方を切ることが必要なのであり、それは大橋が「切れの根本には、人間の自然的欲求をいったんは根元から切って、人間がこの欲求から自由になるということが含まれています」と述べている通りである。

自然の束縛から自由になるための「切れ」であるが、その自然は、日常生活世界のなかでは自覚されないままになっている。「切れ」があらわれるのは、「主体自身が自らの日常的自然性を切って自己についての自覚に達するところ」に他ならない。そして、本来の自然性は、日常的な自然性を「修業とか訓練とかによって突き抜け、これを切るところに」あらわれることになる。これが自覚の域にまで熟成した「切れ」、つまり「切れ」の自覚的な遂行である。

この「切れ」は「断続の切れ」ではない。切れつつしかも続くような「切れ・つづき」である。したがって、いったん「切れ」をくぐった自然性は切り捨てられるのではなく、切った後で生かされる(高次の仕方で蘇って続く)ことになる。「切れ」とは、「それを通して太古の自然性が断ち切られたのちに蘇るところの場」なのである。次の一文は、大橋が芸の型に認められる切れについて述べたものである。「芸」をセラピーの「技術」と置き換えてみるとよい。

「余剰を切り捨てるということは、日常的な自然性を切るということである。しかしその切れを通して日常的な自然性が、いっそう深い相において蘇るというところに、型の切れの本質がある。そこに「芸」というものがある。「芸道」とは、切れを通して自然性を蘇らせる道といえるであろう」



利他の欲求は、いったん「切れ」をくぐることによって利他の意志となる。しかし、自然としての欲求は切り捨てられるのではない。利他の欲求と意志は、「互いに切れて独立しながら互いのあり方のうちに浸透していく」ことになる。双方は互いに開かれた「切れ・つづき」をなしており、自然の束縛を脱して自由となったセラピストは、「いったんは切ったものの中に自在に出入りする」ことが可能となるのである。このようにして、「切れ」をくぐる以前と以後の光景は一変し、利他の欲求という初心は忘れ去られることなく、利他の意志の中で生かされることになる。

### 3. ダイナミック・アセスメントによって作られる「切れ・つづき」

ここまでは、セラピストの内的な自然における「切れ・つづき」としての枠について論じてきた。ここからは、セッションの開始時と終了時にダイナミック・アセスメントを行うことの意味を、その構造的側面から考えてみたい。これには、「切れの構造に含まれている基本的なエレメント」としての「時」(大橋, 1986)の視点も含まれている。

セラピストとクライアントは、セラピー開始時に一礼して挨拶を交わしてから着席し、その直後に1回目のダイナミック・アセスメントが行われる。まずここで「切れ・つづき」が発生し、セラピーの開始が告げられることになる。ここで二重の「切れ」をくぐるわけであるが、まず一礼による挨拶は、互いに対等な人としての関係(普通の関係)とクライアント・セラピスト関係(倫理的关系)のあいだの「切れ・つづき」を作り出すものである。それに続くダイナミック・アセスメントの手続きは、クライアントとセラピストのそのような関係意識をよりいっそう強める「切れ・つづき」を作り出すように思われる。

このようにして二重に枠づけされることによって、極めて逆説的ではあるが、セラピス

トとクライアントのあいだに安全な戯れの現れる準備が整えられる。「切れ」をくぐった分厚い枠によって保護される場所から無心の遊びが「つづき」、自然的生命が素直に発露するような「時」が、言い換えると「素の時間」(樽味, 2002)が現れてくるのである。しかしながら、無心の遊びと言っても、それは単なる戯れではない。あくまで、いったん「切れ」をくぐった「つづき」としての遊びに他ならず、他方では伏在化した枠によって厳しく制限されているのである。

セッション終了時に、2回目のダイナミック・アセスメントが行われる。セラピストは「では冒頭で行った検査をまた」と切り出し、クライアントは検査用紙に記入していく。回答が終了した後、セラピストは採点作業を行って結果を示す。それからクライアントはセッション前後の感情の変化を内省し、さらに今回のセッションを振り返って感想を述べていく。

この2回目のダイナミック・アセスメントによって作られる「切れ」は、神田橋の言葉で言えば「しらけ機能を用いた動きの凍結」としての「揺れ静めの操作」になるであろう。「切れ」をくぐった後のセラピストとクライアントは、このとき、「切れ」をくぐる前とはまったく切れた存在となっているのである。

揺れ静めの作用の他には、「切れ」をくぐることによって、セッションの場面がその前後に分節化して枠づけられる。「切れ・つづき」の過去であるセッション全体が浮かび上がり、セッションを外から眺めて振り返ることが可能となるのである。クライアントとセラピストは、このときセッション全体からまったく切れた存在であると同時に、そこにつづく存在でもある。二人は、枠の外側へ協同注意を向けながら振り返り、語り合うことになる。

このように、ダイナミック・アセスメントを行うことによって、まずセッションの冒頭

で枠が顕在化し、セッションの真っ只中で枠が伏在化し、セッションの終了時に再び枠が顕在化する流れとなる。だが、二度顕在化する枠の意味は異なっており、1回目はセッションの開始を告げて二人の関係性を意識させる鐘の音の色彩が、2回目は終わりを告げる揺れ鎮めの色彩がそれぞれ色濃くなるように思われる。

最後にこの枠は、それぞれのセッションを互いに「切れ・つづき」という非連続の連続において連関させ、一回きりの出会いを繰り返す一期一会の「時」を反復可能とするものである。一期一会の反復は、利他の欲求という我欲を満たすためにクライアントを利用する自己中心主義を放棄し、この一瞬を大切にしてみずからを自己目的とするクライアントを承認するための大前提である、尊敬の念を育む。このようにして枠は、クライアントとセラピストのあいだに、尊敬の念をもって誠意を尽くす倫理的関係を実現するのである。

## V. おわりに

セラピーの枠を補強して倫理的関係性を維持・改善することを目的とした、ダイナミック・アセスメントの応用的な使用法について検討した。ダイナミック・アセスメントを、インテーク面接のみならずその他すべてのセッションにおいても行った事例は今回がはじめてであったが、目的に応じた使い方を工夫することによって、その使用法は今後ますます多様化していくことであろう（注釈）。

本論で取り上げたのは、セラピストがみずからに課すモノローグの枠が中心であった。だが、この他にも枠にはさまざまなものがあり、セラピストがクライアントに対して一方的に課す権威的なモノローグの枠や、セラピストとクライアントのあいだで相互に課される協働的なダイアログの枠についても考察する必要がある。職業倫理や哲学的な倫理学

に接近する内容になるであろうが、次に取り組み課題としたい。

## 注 釈

本例以外で毎回のセッションにおいて状態不安のダイナミック・アセスメントを行った事例がその後あり、参考資料としてデータを掲載しておく（資料）。掲載にあたっては、本論の事例と同様のインフォームド・コンセントを経ている。事例は50代の女性で、インテーク面接時のSTAIによる特性不安が99パーセント、ラストセッションのそれが93パーセントであり、時間制限の多元的ブリーフセラピーでは高不安が改善されたとは言えない。資料のグラフに示したが、インテーク面接において状態不安にあまり変化が認められず、気分・感情の変化の感覚に疎いことが判明したために、変化を感じる力を向上させることを目的として合意のもとにすべてのセッションで実施したものである。注目されるのは、4回目セッションとラストセッションで状態不安が上昇していることである。この上昇は、いずれのセッションも事例にとって核心的な問題に触れたことに起因しているであろう。当初のゴールが達成されたこと、時間制限であることを根拠として一応ここで終結となったが、それも何かあったときの再来を約束した上でのことである。いま現在のデータ（田澤・本田, 2017）では、インテーク面接前後における状態不安得点の差がマイナス24パーセントに至らない事例においては、特性不安が短期的及び中期的にあまり低減しないことが分かっている。本論で検討した事例も、この資料で提示した事例も、これに該当するものである。

## 文 献

- 神田橋條治 (1990) 精神療法面接のコツ. 岩崎学術出版社.
- Lidz CS (1991) Practitioner's Guide to Dynamic Assessment. The Guilford Press.
- Lidz CS & Elliott JG (2007) Dynamic Assessment: Prevailing Models and Applications. JAI Press.
- 森岡正芳 (1991) 見える枠と見えない枠. (森谷ら (1991) 心理臨床学の冒険, 星和書店, pp.67

-84.)

- 森谷寛之・酒木保・児島達美・菅野泰蔵・森岡正芳・森岡理恵子 (1991) 心理臨床学の冒険. 星和書店.
- 中井久夫 (1970) 精神分裂病者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって得られた知見について. 芸術療法, 25, 1-9.
- 中井久夫 (1974) 枠づけ法覚え書き. 芸術療法, 5, 15-19.
- 大橋良介 (1986) 「切れ」の構造—日本美と現代世界. 中央公論社.
- Rank, O. (1929) Technik der Psychoanalyse. Band II. Die analytische Reaktion in ihren konstruktiven Elementen. Psychosozial-Verlag. (Trans. by Taft, J. (1936) Will Therapy. Alfred A. Knopf.)
- 樽味伸 (2002) 慢性期の病者の「素の時間」. 治療の聲, 4, 41-50.
- 田澤安弘・近田佳江 (2017) インテーク面接におけるダイナミック・アセスメントのためのマニュアルと, ダイナミック・アセスメント後の情動的及び認知的変化に関する単一事例研究. 北星論集, 54, 81-102.
- 田澤安弘・本田泉 (2017) 初回面接前後の状態不安の変化と多元的ブリーフセラピーの効果との関連性—インテーク面接へのダイナミック・アセスメントの導入. 北星論集, 54, 75-80.
- 田澤安弘・近田佳江 (2018) 私設心理相談室で行う“治療的な”アセスメント—インテーク面接における状態不安のダイナミック・アセスメント. 田澤安弘・橋本忠行 (編著) ナラティヴと心理アセスメント—協働的/治療的につなぐポイント. 創元社, pp.123-142.
- Vygotsky LS (1935) 土井捷三・神谷栄司訳 (2003) 「発達の最近接領域」の理論: 教授・学習過程における子どもの発達. 三学出版.

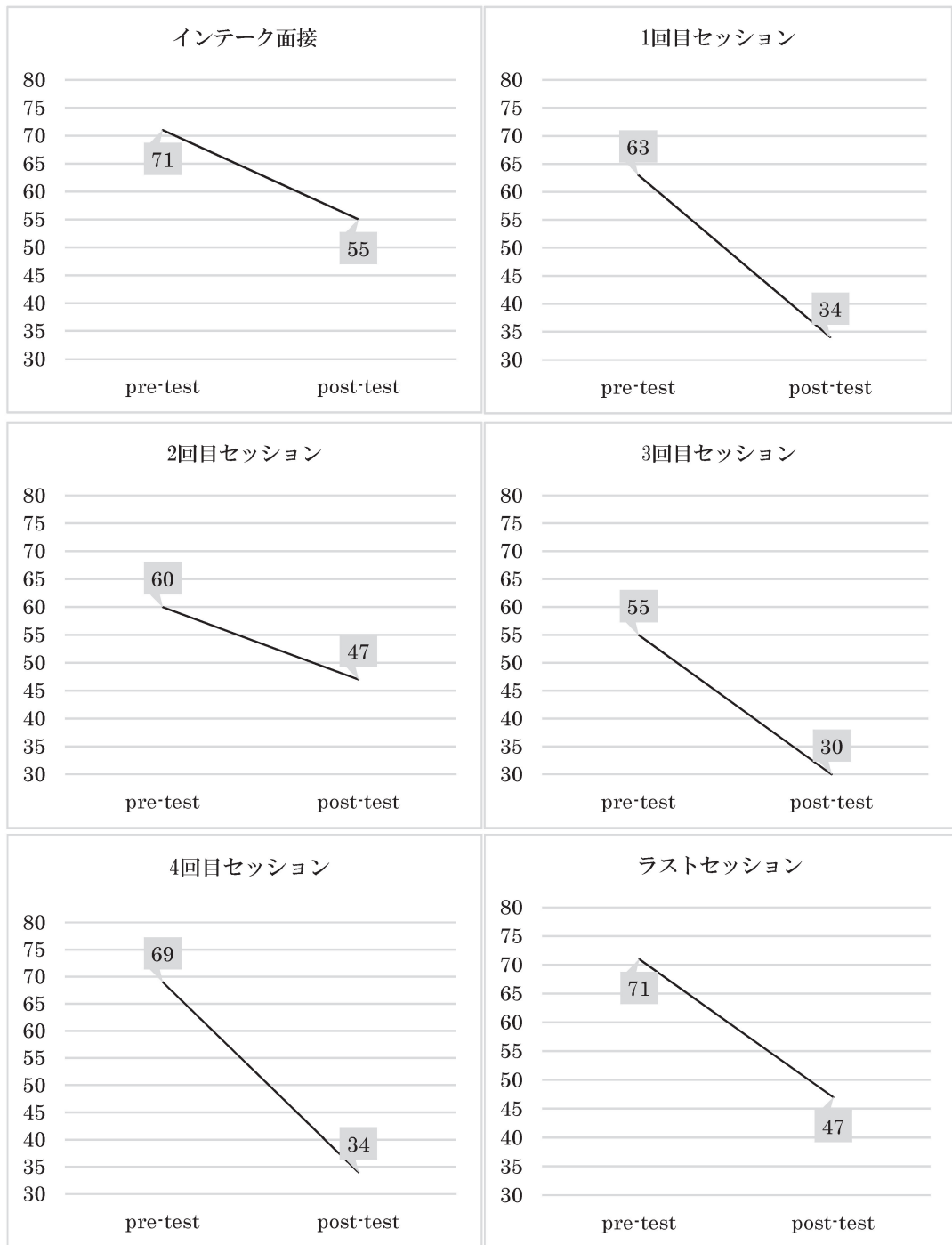


図 各セッションにおける状態不安の変化

資料 各セッションにおける状態不安の変化

